

「贗の季節」とは何か

——梅崎春生の戦争批判——

はじめに

梅崎春生の「贗の季節」(昭和二年二月「日本小説」)は、終戦直後の混乱の中、客の不入りから先の興行地を夜逃げし、解散の危機に直面している曲馬団を舞台にした短編小説である。語り手兼主人公の「私」は集客のために、芸のできない猿の「お爺さん」に洋服を着せて舞台に出すことを提案するが、それをめぐって団員たちはいがみ合い、人間関係が歪んでいく様子を描いている。

武田友寿氏は「梅崎春生・『幻化』——贗の季節への挽歌」(「戦後文学への道程」昭和五五年五月、北洋社)の中でこの

高木伸幸

小説を取り上げ、「『贗』なるものの告発」という、梅崎春生が好んで追求した主題が、そこには真正面から扱われていると論じた。「お爺さん」と呼ばれる老猿に洋服を着せて舞台に出すことを考えた「私」の真意は、戦後の社会を生きる人々の「偽態を衝く」ことにあり、当時横行していた「『贗の季節』の風潮を告発」しようとした一作だと論じているのである。

また和田勉氏は「梅崎春生の文学」(昭和六一年一月、桜楓社)の第二章第六節「短編小説」の中で、「贗の季節」は「闇市の時代の飢餓を主題とする、戦後派的な、観念的なところのある作品」であり、「戦後の混乱した時代では、ニセモノが横行する」ということをコミカルにアイロニカルに表現した

好短編であ」と評した。

以上二つの論考は、どちらもこの小説の表面的な部分に關して的確な分析を見せている。従つて「賈の季節」の特色を大まかに捉えた考察として評価できよう。しかし両論ともに作者が描いた二セモノとは何であるのか、詳しい考察は必ずしも為されてはいない。またより踏み込んで解釈すると、(賈の季節)とは戦後の社会よりも、むしろ戦時中の日本を表す言葉であるように思われる。

よつて本論では、「偽者」とはどのような人物かを分析した上で、(賈の季節)という言葉の表すところをより具体的に解明することを目的としたい。以下、少し考察する所以である。

—

二セモノとは何であるか。それを考える一つの手掛かりが曲馬団の団長の台詞の中に認められる。曲馬団の財政の貧窮と関連して、団長は団員たちに次のような説教じみた演説をしているのである。

私が借金したり夜逃げまでして曲馬精神を盛り立てて行こうとしているのに、お前たちは内部から私に煮湯を吞ませるようなことはかりをする。(中略)お前たちは皆目自信をなくしているのだ。自信をやくざなものと掬りかえているんだ。お前たちは皆偽者だ。お前もだ。

お前もだ。(団長は一人一人指さしながら)お前達は揃いも揃つて、みな糞土の牆だ!

団長は「偽者」と見做した人間たちに「糞土の牆」という言葉をおつけている。論語を典故とする「糞土の牆は朽るべからず」から採つた言葉で、本来はへくさつた土の壁は朽で塗ることができないことへ、(なまけ者には教育する甲斐がないこと)を意味している。ここではおそらく、団長の気持を解さず、碌な働きをしない団員たちに向けて、(どうしようもない役立たず)ぐらいの意味で使われているのであろう。この言葉は物語の終盤になつて再び登場し、象徴的なイメージを形作る役割を担っている。

しかし右の団長の演説で、それ以上に注目すべきなのは、団長が曲馬団の面々を「偽者」と決めつけた理由である。「皆目自信をなくしている」から、「自信をやくざなものと掬りかえている」からだと言っていることである。この団長の言葉と併せて、物語の冒頭近くの「私」の言葉に目を向ければ、この小説において如何なる人物が「偽者」と見做されているのかよくわかるであろう。「お爺さん」に洋服を着せて舞台上出す提案をした「私」は、その直後に次のような感想を抱いているのである。

人間様とは何だろう。冒瀆とはなにか。守るべきそ

んなぎりぎりの一線を、此の三五郎がまだ保っているのかと思うと、冷たい可笑しさがおのずと湧き上つて来るのを感じたが、考えて見ると此処の団長にしても団員の面々にしても、最後のよりどころとしているのは矢張りこんな種類の奇妙な辻褃のあわない自尊心なので、こういう私といえども本当のところでは此の類を洩れないのかも知れない。

三五郎は「お爺さん」の動作を真似て観客の笑いを取っている道化師で、「私」の提案に際しては「人間様に対する冒瀆だ」と主張し反対した。本当は「本物」の「お爺さん」の登場で「偽物」の自分の芸に生彩が失われることを恐れたのだが、三五郎はその本心を隠してもっともらしい理由を挙げてみせた。その心の在り方について「私」は、「私」自身や団長たちにも通ずるものを感じつつ、「奇妙な辻褃のあわない自尊心」と称したのである。

以上より「自信」や「自尊心」に関する心の持ち様から「偽者」を認定していく梅崎の考えが見えてきたであろう。言い換えれば、「奇妙な辻褃のあわない自尊心」という「やくざなもの」を「自信」と「掘りかえている」者たち、自信を失い自分を胡麻化して生きている人間たちこそ、この小説における「偽者」だと考えられるのである。

実際、三五郎に限らず、「大言壮語はするがしんは気が弱

い」性格の団長など、登場人物の大多数がそのような「偽者」として描かれている趣が強い。中でも「私」はかつて「立派な曲芸師」だったが、戦争で片腕を失い、復員後は「曲芸も出来ずに雑用夫みたいな形」で再び曲馬団に雇われている人物として設定されている。「私」は「生きる」ことへの「自信をなくしている」が、しかし曲馬団の仲間たちには「憐れまれたくない」と思うことで自分を胡麻化している。つまりこの小説は「私」という一人の「偽者」の視点から、曲馬団の面々ら多くの「偽者」たちを観察し、感想が述べられていく形で成り立っているのである。

ここで同じ作者の他作品を見てみよう。まず本格的文壇デビュー以前に発表された「微生」（昭和一六年八月「炎」という短編を挙げる。会社勤めに「倦怠を覚え始めた」「私」が登場し、組織の中で卑屈に生きる「私」や同僚に比して動物園の動物たちの姿が想像される。そして「私」の感慨として「偽者はかりがうろうろしている此の世界の中で。あの鳥や獣たちだけが、真実の姿をしているのではないか」という言葉が綴られている。

次いで「賈の季節」に近い時期の小説に目を向けると、例えば「蜆」（昭和二年二月「文学会議」）では、「人から貰う御よりやる方になりたい」と考え、喜びもなく善行に努めようとする人間を「偽者」と称している。また「虹」（昭和二年九、一〇月合併「新文芸」）では、先生の「温情に寄生」し

て生活の必要から「翻譯の下請け」をやらせてもらっている「私」が、自分を胡麻化すために「学問に關係がある仕事」をしていると考えることについて、「贗の感情」だと記す。さらに「握飯の話」(昭和三年一月「花」)には、人々が他人に食を分つのは「自分に余裕がない訳でもないということを見せたい」という「ある種の自尊心」からで、「私」が職場の同僚の老人にふかし辛を与える際にも、「老人が食べてくれるのならこれほど有難いことはないという贗の表情をこしらえて」いるという文章がある。

このように一覽すると、自分を胡麻化す奇妙な自尊心の持主を梅崎は早くから「偽者」と捉え、戦後に至るとそのモチーフを繰り返し描いていることが確認できる。中でも初期の「微生」では動物との対比で人間の「偽者」ぶりが捉えられており、「偽者」たちの關係の中に猿の「お爺さん」を登場させた梅崎の着想の萌芽が認められる。そして戦後の作品群においては「偽(贗)」のモチーフへの関心の高まりを確実に感じることができよう。戦争を挟んでその内なるモチーフを深めた梅崎春生は、敗戦後の自信を喪失した日本社会をへ贗の季節として捉え、その空気を「偽者」たちの歪んだ關係の中に表現しようとしたのかもしれない。その意味においてこの小説が戦後の混乱した世相を表していることは確かであろう。

二

しかし「贗の季節」という言葉に託されたものは決してそれだけであるまい。結論から言えば、戦時中の空気までもがそこには表されている気配がある。

まず何より注意すべきことは、先にも少し触れたように、「私」が戦争で片腕を失った人物として描かれていることである。しかもその「私」が物語の終盤に至ると「憐れまれたくない」自分の気持を省みつつ、次のような幻を思い浮かべているのである。

憐れみを憎むこととは、しかし何だろう。それを拒むことで私は何を得たのか。そして私が探りあてたと思つたものは鮫石の露床ではなくて、何かどろどろした汚物であったのかも知れないのだ。

「糞土の牆だつて何だつて良いや」と私は呟いた。(中略) その時隙のうらに突然、延々と重なりつづく黄色の宏壮な壁の幻が蟹気楼のように浮び上つて来た。それは私が大陸で、片腕を失つた瞬間に眺めていた城壁にも似ていたが、またもつとなまなましく身に迫る堆積のようでもあった。ある灼熱感が私いっばいを満たしていた。

ここにおいて「私」は自分の「憐れみを憎む」気持から、自らが「糞土の牆(偽者)」であることを認めているとまず考えられる。「どろどろした汚物」という言葉を使っているが、

これは自分の心の醜さを表すのであろう。次いでそれらと併せて、「私」が戦地で眺めていたらしい「黄色の宏壮な壁の幻」を思い浮かべているのは、おそらく「私」の憐れみを憎む気持ちが戦争で片腕を失った瞬間に始まったことを意味しているのではあるまいか。「私」が「灼熱感」に満たされているのも、戦地で片腕を失ったその時を想起させたからだと思われる。さらに「私」はその壁の幻について、「もつとなまなましく身に迫る堆積のよう」だとも言っている。これは「糞土の牆」を連想させる言葉でもあり、生きる自信を失って以来、「私」の心に堆積してきた何かを表しているのかもしれない。ちなみに梅崎春生は「微生」で「私」の「毎日の、憂鬱な気持」を「堆積してどうにもならない」ものだと表していた。加えて出世作「桜島」(昭和二年九月【素直】)では、主人公の戦争に対する思いを次のように記している。

私を此のような破目に追いこんだ何物かに、私は烈しい怒りを感じた。突然するどい哀感が、胸に湧き上った。何もかも、徒勞ではないか。此のような虚しい感情を、私は何度積み重ねてはこわして来たのだろうか。

「私」の心に堆積した「糞土の牆」のごときものは、右に挙げた「堆積」や「積み重ねてはこわして来た」ものと、おそらく同質であろう。自分の片腕を奪った何物かに対する怒り

や、憐れみを拒絶して生きてきたことへの虚しさ、糞土のごとき黄色い壁となつて「私」の心に積み重なっているのではないかと考えられるのである。

なお、ここでさらに注意すべきことがある。「私」が片腕を失った場所が、南方の戦地ではなく、あえて大陸に設定されていることである。なぜなら梅崎春生の弟忠生が大陸に応召され、そこで死を迎えていた事実を反映しているように思われるからである。

例えば梅崎は「桜島」で自分の思いを主人公に託し、「弟はすでに、蒙古で戦死した。俄かに荒々しいものが、疾風のように私の心を満たした。此のような犠牲をはらつて、日本という国が一体何をなしたのだろう」と書いている。さらに後年のことではあるが、梅崎は弟の大陸での死を素材に、長編「狂い風」(昭和三八年一月〜五月【群像】)を書いている。そこには弟をモデルにした矢木城介が、「黄沙」の舞う中、「城壁」の見える蒙古の砂漠で初年兵教育を受けたことが、城介の戦友であった加納という人物の回想で語られているのである。しかも初年兵教育の最後の演習の際には、砂漠の河床道に「人間の腕」が「ごろりと横たわっていた」のを城介が見たことが、やはり加納の回想で語られ、また城介の兄の栄介(つまり梅崎春生に該当する人物)も戦地から送られてきた城介の手紙でそのエピソードを知っていたことが記されているのである。これと同様の出来事を忠生が体験し、兄の梅

崎春生へ手紙等で伝えていたことは十分ありえるであろう。弟の大陸での戦争体験と死が、作者の想像力を通して複雑に再構築され、「贖の季節」における片腕を失った「私」を生み出したのではあるまいか。

だとすればこの小説の根底には梅崎春生の戦争批判が潜んでいる可能性が高い。それを間接的に裏付けるエッセイとして、同じ作者が「贖の季節」とほぼ同時に発表した「ランブの下の感想」（昭和二十二年一月「新小説」）が挙げられる。そこで梅崎は、日本人が「人間を凝視した世紀すらも持たない」ことを主張するにあたって、「数百の韓艦や数千の戦車やそして数万の竹槍をほこった日本の贖の世紀は没落した」という言葉を用いているのである。梅崎春生がこの時点で戦争を「贖の世紀」として、すなわち「贖の季節」として捉えていたことは明らかであろう。どうやら戦争批判の視点から、この小説を捉え直してみる必要があるとそうである。

三

この小説には「潰滅の予感」とか「一種終末的な感じ」といった種類の言葉が繰り返して用いられている。これらが解散の危機に瀕した曲馬団の雰囲気を表していることは言うまでもない。しかし以下にいくつか例示する言葉と併せて解釈すると、もう少し重層的な表現として見る事ができる。

例えば三五郎はまもなく解散が確定という曲馬団の中で、

自分はどうかありたいか次のように話す。

俺は一所懸命やってきた。俺は仕事を投げ出さなかつた。（中略）仕事を、自分を投げ出さなかつたというこゝとだけが、俺の心には残るだろう。

この言葉を聞いた「私」は、三五郎が「自分を胡麻化しているに違いない」と感じた上に、「自分を投げ出さなかつたということを心に刻」もうという三五郎の考えについて「あまり虫が良すぎる」と思っている。またこれに関連して「私」は曲馬団の現状について次のように感じていた。

こんな羽目に落ちてはまだ絶望せず無感覚な営みをつづけて行こうという一座の連中は何と言っているだろう。それを思うとすべては朽木に止金³をつけるよりもっと果敢ない感が湧き上って来る（下略）。

このような三五郎や曲馬団の人々に対する「私」の感想は、ただに相手を「偽者」と決めつけた言葉ではあるまい。そこには戦時中の、ことに「潰滅の予感」や「一種終末的な感じ」が漂っていた大戦末期の日本の在り方に対する梅崎春生の見解が隠されているのではあるまいか。敗色が濃厚でありながらひたすら無為な戦いを続け、あたかも仕事を投げ出さな

ったことで自分たちの心を胡麻化そうとしていたかのような軍部を中心とする日本人の「偽者」ぶりが批判されていると考えられるのである。

次いでもう一つ、大戦末期の日本を彷彿させる設定として、スパッツを着けた身なりの良い老紳士と曲馬団との関係に注目したい。その老紳士は「私」のもとへ、死去した自分の父親に似ているから猿の「お爺さん」を譲ってほしい、と申し出てきた人物である。しかし「私」を除いた曲馬団の連中は、毎日客席に現れる老紳士のことを不審に思い、夜逃げした先の町から追いかけてきた町長ではないかと思ひ込む。しかも老紳士と「私」が立ち話するのを見かけた団員たちは、それが曲馬団売り渡しの密談だと勘違いし「私」に冷たい非難の視線を向けてくる。

「私」は自分に対する疑惑の理由が団員たちのあらぬ思い込みにあることに気付いた際、次のような気分を襲われている。

何か訳の判らない不安なものがじわじわと私の胸の中に拡がって来た。それは奇妙に浅く底が割れたからくりの奥に、自分等の漠然とした脅えをあの手紳士に仮託していた一座の人々の心情の在り方が、俄に破局的な感じで私を貫いて来たのである。

「私」はこの後「それは誠にいやな予感を伴っていた」とも述べており、ここに言う「破局的な感じ」とは曲馬団の「潰滅の予感」をまずは表しているよう。そしてそれは同時に大戦末期の日本人の多くが抱いていた「敗戦の予感」をも表現しているのではないだろうか。また曲馬団の人々が老紳士に「漠然とした脅え」を抱いていたことは、自信を喪失した「偽者」たちの心情を示しつつ、敗戦直前の日本国内に漂っていた不安感を象徴していると考えられるのである。

「桜島」を見ると、大戦末期の海軍には敵国上陸の噂が流れ、終戦一週間前の昭和二〇年八月一日の真夜中には、見張所の兵士が夜光虫を「敵船団三千隻」と誤認する一場面がある。老紳士を先の町の追手と思ひ込む曲馬団の人々の心の有り様は、同じ作者が「桜島」に記したこのエピソードにまさに重なるところが認められるのである。しかも解散直前の曲馬団とは対照的に、老紳士は身なりも良く財力の豊かさが強調されている。この点を深読みすれば日本と敵国アメリカの關係を暗示する気配さえあることも付け加えておきたい。

ところでこの物語のそもその発端、つまり「私」が芸なし猿の「お爺さん」に洋服を着せて舞台に出そうとしたこと、本当の理由はどこにあったのであろうか。直接の切っ掛けは「猿の猿真似」をする三五郎の芸が「偽物」のため、「お爺さん」の「本物」を見せてやろうと「私」が考えたことにあった。しかし、それはあくまで表面的で、実際は作者の戦

争批判に支えられたもう少し深い意味が隠されているようである。「私」は次のように言っている。

私は私に絶望しているのだ。だから私は人間にも絶望しているのだろう。その絶望を確めたい為にも私は「お爺さん」に洋服を着せて舞台上に立たせたくて仕様が無いのである。

「私」は「私」自身や曲馬団の人々を含めた多くの人間たちが「偽者」であることに絶望し、その絶望を洋服を着て舞台上に立つ「お爺さん」の姿を見つめることでより強く実感できると言いたのである。つまり「偽者」たちを洋服を着た「お爺さん」と同じかそれ以下のレベルの存在として皮肉うとしているのである。「微生」において既に少し表れていたところの、人間より獣の方がむしろ本物という梅崎春生の考えがここから垣間見えるようである。

他にも「私」は「お爺さん」に洋服を着せる提案をした際、団長が「沐猴にして冠す」という史記の言葉を引用したことについて、「(団長は)此の言葉が此の場合持つおそろしい意味など感じている訳はないのだ」と言っている。また「沐猴にして人間服を着用した徒輩の前」で「お爺さん」が「演技をして見せる」ことで「私をふくめたおのおのものが自らの醜く哀しく露床を、憂然と掘りあてることが出来るだろう」と

も述べている。さらには「人間を他の動物から画然と區別する一線」は各自の「妄想に過ぎ」ず、「案外二千六百年もさかのほれば身体の端に尻尾をつけていたかも知れないのだ」という「私」の言葉も認められる。これらは人間たちが、特に皇紀「二千六百年」と自称する日本人が洋服を着た猿に過ぎないことを強調し、そして洋服を着た「お爺さん」の姿によって、そのような日本人の「醜く哀しい露床」つまり本性が暴露されることを表していると言えよう。しかも「お爺さん」に着せる予定だったのが和服でなく、「英国風の高雅な型」の洋服であることに注目すれば、日本人が西洋文化の「猿真似」をしてきた民族に過ぎないこと、西洋という衣装を身に纏った猿に過ぎなかったことが諷刺されていると言えるのではないか。

ここに来て想起されるのは、先に検討した「黄色の宏壮な壁」のイメージが物語のクライマックスにおいて再び描かれていることである。仮縫の洋服を着た「お爺さん」が逃げ出し、団員たちや洋服屋、スパッツの老紳士らが一緒に追いかけていく場面の中にそれは登場する。曲馬団売り渡しの勘違いで怒った三五郎から「私」は床に押さえつけられており、その「私」の視点によって次のように描かれている。

その一瞬の区切られた風景の中で、土手の端を「お爺さん」は茶色の服をまよったまま凄まじい速力で駆けて

いた。豆粒ほどの上衣の裾が風にはためいていた。その七八間後を色んな人が走っていた。長靴をつけた団長もいたし、細いズボンの老人もいたし、髪をなびかせた服屋もいた。両手を上にあげるような走り方で、皆そろって大豆粒ほどに見えた。頭に血が来ないせいかわ景が黄色く色褪せて、古絵のような現実感のうすい背景の中を、小さい人と小さいいけものは素晴らしい速度で駆けていた。土手は黄色く色彩を喪い、まるで城壁みたい凹凸がなかった。もはや幻影に近い黄色の城壁の上をさんさんたる陽光にまみれながら駆け行く群像の影絵は、既に人間やけものの属性を失って、奇怪な悪夢のような人形芝居の一場面であった。ある灼熱が身体から手脚の先に電流のように走った。言いようもない深い烈しい悲哀の念が私の胸を荒々しくこすり上げて、私は充血した顔から頭から、汗とも涙とも知れぬ熱いものをいっばい吹き出しながら、はずみをつけて三五郎をはねとばすと、左手をあげて転がった三五郎の身体の上に猛然と掴みかかって行つた。

「黄色の城壁」の上を「お爺さん」と団長らが走るこの無気味な光景は、直接には「偽者」たちのいがみ合いを表しつつ、大陸での戦争のイメージが重ねられているように見える。

「駆け行く群像の影絵」が「人間やけものの属性を失」い、「奇

怪な悪夢」のようだと言われているのは、大陸で戦争を始めた日本人がけもの同然であったこと、先の大戦は芸なし猿のごとき「偽者」たちが引き起こした「悪夢」であったことを暗示していると考えられる。三五郎に組み敷かれた姿勢からその光景を目にした「私」は「ある灼熱」を身体に走らせ、「深い烈しい悲哀の念」を抱いているが、これはかつて片腕を失った時と同様の烈しい痛みが、この瞬間「私」の心に走ったことを意味しよう。つまり「偽者」たちの歪んだ人間関係に心を痛め、その中に戦争と同様のおろかさを感じ取った「私」の虚しい思ひの堆積が「黄色の城壁」として表されているのである。そしてそのイメージは「贗の季節」という言葉が梅崎春生の戦争批判をも表していることを抽象的に語っていると言ふことができよう。

おわりに

梅崎春生は昭和一九年六月から二〇年八月一五日に終戦を迎えるまで海軍の応召兵として過ごし、自らの従軍体験を素材にした「桜島」で文壇に登場した戦後派作家である。「桜島」から約一年二ヶ月後の発表にあたる「贗の季節」は、梅崎が従軍中に感じた大戦末期の不安感や弟の大陸での死などを暗示的に記すことで、作者の戦争批判を抽象的かつ諷刺的に表した小説と言える。戦後世相の下に「偽者」たちを描きつつ、戦争という「贗の季節」の有り様を重層的に浮かび上

がらせたこの小説は、梅崎春生の時代認識と手法の深化を窺わせる貴重な一作と見做せるだろう。

注(1) この小説では「偽者」、「偽物」、「贋物」の三つの表記が見られる。「偽」の字には人偏が含まれている故に、「偽者」は人間そのものに、「偽物」は人間である三五郎の芸に對して用いているようである。一方、いま一つは「本物は贋物さ」という猿の「お爺さん」を指すらしい言葉として表記され、タイトルの「贋の季節」も併せて、人間以外を含めた対象に「贋」を使用していると考えられる。

(2) 忠生の大陸での死因は当初、戦病死と伝えられていたが、戦後五年ほどしてから、実は衛生兵を務める中で薬品中毒になった果ての服毒自殺であったことが判明したらしい。その経緯について、梅崎春生はエッセイ「男兄弟（昭和三年一月）新潮」に簡単に記し、「狂い風」には小説の形で詳しく書いている。また忠生の下弟、梅崎栄幸の「兄、春生のこと」（講談社版『現代の文学5』『月報』昭和四九年八月）にも同様の記述が見られる。しかし「桜島」や「贋の季節」を書いた昭和二二、二年の時点では、忠生は戦病死したと作者は思っていたようである。

(3) 城介が見つけた「人間の腕」は、女性のものであり、土葬されていた死体を野犬が掘り出してくわえてきたことが記されている。従って、「贋の季節」の「私」のような、戦闘で失われた男性の腕では決してない。しかしそのような相違点も含めて、このエピソードが梅崎春生の想像力に何らかの影響を与えた可能性を本論では指摘したつもりであ

る。
(4) 「朽木に止金」とは論語の「朽木は彫るべからず」に拠った表現であろう。「糞土の牆」とはほぼ同じ意味を表し、二つを併せて「朽木糞牆」という四字熟語に一括される言葉である。作者の「偽者」観はこのようなさりげない表現の中にも認められる。

*梅崎春生の作品引用は、新潮社版『梅崎春生全集』全七巻（昭和四一年一〇月〜四二年一月）に拠った。